

2021年11月28日降臨節第1主日説教

ゼカリヤ書14章4－9節

テサロニケの信徒への手紙一3章9－13節

ルカによる福音書21章25－31節

本日は、2021年度の主教巡回日です。高橋宏幸主教様の司式のもと、聖餐式が行われます。また牧師任命式、そして堅信式があります。赴任してすでに半年以上が経過しておりますが、あらためて任命された牧師として、本日は、説教の任を果たしたいと思えます。

教会歴の上では、新しい一年が始まりました。昨日は、それぞれの係りの方々が、アドベントの飾りつけなどの準備をしてくださいました。聖書日課もC年となり、アドベント・キャンドルの一本目が点灯されました。アドベント・キャンドルには、それぞれ意味があり、一本目のろうそくの意味は、「希望」だと言われています。キャンドルの趣旨からいえば、本日は、イエス様がこの世界にとって、まことの希望であることを、確認することが大切です。しかしながら、聖書日課は、直接的に希望について示しているわけではなりません。旧約日課の「ゼカリヤ書」14章と「ルカによる福音書」の21章は、終末時の黙示的内容、つまり終わりの日について書かれているからです。教会歴の始まりの日に、終わりの日についての聖書から学ぶのかと思ってしまうのですが、先週、先々週も「終わり」が主題の一つでした。それは、「終わり」とは、「始まり」であり、それがイエス様の示す希望と関係しているからです。

まず、「ゼカリヤ書」について簡単に触れてみますと、この預言書がいつ書かれたのか正確に分かりません。ただし、1章1節に「**ダレイオスの第二年八月に、イドの孫でベレクヤの子である預言者ゼカリヤに主の言葉が臨んだ**」とありますので、バビロン捕囚以後であることは、確かだと思えます。また、9章以降は、黙示的内容が多いことから推測しますと、イスラエルの人々が、預言者の言葉に、耳を傾けなく時代に書かれた推測されます。先週の旧約日課は、「ダニエル書」でした。本日の箇所が含まれる「ゼカリヤ書」の9章以降は、その「ダニエル書」と近い時代に書かれたとも推測されます。また両者ともこの地上に起きる様々な破壊的な出来事を語りつつ、イスラエルの人々に何かを伝えようとしています。そして、両者とも破壊的な出来事について、それぞれの仕方ですが、単に絶望を語っているのかというところではありません。語っているのは、イスラエルの救いまたすべての人の救いです。本日の日課の最後に、「**主は地上をすべて治める王となられる。その日には、主は唯一の主となられその御名は唯一の御名となる**」（ゼカ14:9）とありますように、「ゼカリヤ書」は、主なる神様が、すべての民の王となる、すべての人を救われる王となると語っています。ただし、それはかつて存在したような、地上にある王国としてのイスラエルの上にも実現するというものではありません。「ゼカリヤ書」が書

かれた時代、イスラエルにはそのような王国も王も存在していませんでした。そして、それらがもう一度登場すると語っているわけではないのです。本日の旧約日課の少し前、14章1節に「**見よ、主の日が来る。かすめ取られたあなたのものが、あなたの中で分けられる日が**」とあります通り、「主の日」において起こります。「主の日」、それは、この地上の歴史的出来事の一つの時ではなく、すべてが変わる決定的な時です。言い換えれば、終末の時という表現になりますが、そのような仕方で救いが起こると語られているのです。ただし、イスラエルにとっても、わたしたち教会に集められるものにとっても、そのような主の日はまだ到来していません。しかし、わたしたちは、その日をイエス様のご生涯と十字架と復活を通して、しっかりと認識して待つことができます。それが希望と大きくかかわっています。

福音書の箇所は、「ルカによる福音書」でそのイエス様自身がついて語っている箇所です。マルコ福音書の13章と並び、この世界に天変地異が起こることを示し、その先に人の子であるイエス様の再臨があり、神の国の到来があると語っています。ことにルカ福音書の方は、「**人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。**」(ルカ 21:26)とある通り、「ゼカリヤ書」の内容を遥かに超えて、宇宙にも及ぶような、恐ろしい出来事について語っています。

「ゼカリヤ書」と「ルカによる福音書」は、書かれた時代も状況も違います。しかし、共通していることは、その時代に地上で起こっていることは、主なる神様の視点からいえば、正しい事柄でも平和的な事柄でもないということです。また、恐ろしいこと、また悲しいことが起きているということです。そして、そうであるがゆえに、どんなに恐ろしいことが起こったとしても、主なる神様がおられる限り、その先には、必ず希望があるということも共通しています。「ゼカリヤ書」は、その希望を「主の日」という決定的な日の到来で示しましたが、わたしたちにとっては、イエス様がその希望を示されます。

さて、今週から準備に入りますアドベントは、イエス様の誕生をお祝いする準備の期間です。イエス様の誕生とは、言い換えますと、この世界に希望が誕生したことを意味することになります。ただし、最初に書かれた「マルコによる福音書」にもパウロの手紙にも、イエス様の誕生については、何も記していません。それは、イエス様がまことの希望を示す方であることを、イエス様のご生涯と十字架の出来事、そして復活を通して示したからです。

しかし、まことの希望を示してくださるイエス様は、神話の世界の登場人物のように、人間とは全く異なる状態でこの世界に現れたわけではありません。あるいは誰が見ても王様あるいは指導者とわかるような、特別な場所や状態で生まれたわけでもありません。むしろ、イエス様の誕生の出来事は、誰も注目しなかったような、一人の人間の誕生という小さい出来事であったと、「ルカによる福音書」そして「マタイによる福音書」は伝えています(聖霊によるという不思議な表現はありますが)。それは、イエス様が示してくださる希望が、人

間の考えや想像を超えているが、しかし同時に人間とかけ離れたような事柄でもないことを示していると思います。これは論理的に矛盾しています。しかし、そこにイエス様の示す希望が、まことの希望であることの証しです。

それでは、人間の思いや考えを超えてはいるが、しかし、わたしたちと全くかけ離れているわけではない希望、そのような希望をどのようにして認識することができるのか、感じ取ることができるのか、そのヒントを、使徒書である「テサロニケの信徒への手紙一」から見出したいと思います。

この手紙は、パウロの手紙の中でもっとも古いものです。それは言い換えれば、新約聖書の中で、文書としては最初に書かれたものであることを意味します。もちろん、この手紙が、教会の始まりについて、すべてを示すわけではありませんが、教会に集められる人々が、初めの頃は、どのような感覚であったかについて、知ることができます。

現在、火曜日の聖書を学ぶ会で、この手紙を学んでいます。それに参加されている方にとっては、すでに学んだ事柄ではありますが、テサロニケの教会について、簡単に振り返りますと、この教会は、パウロが、49年の第二回伝道旅行の際に、シルワノとテモテと共に、ピリピからテサロニケにきて、建てたと考えられています。もちろん、教会といっても、建物や組織があったわけではありません。信じる人々が定期的集まるようになったということです。しかし、できたばかりの教会は、すぐに混乱が生じてしまったようです。混乱とは、ユダヤ人による迫害によって生じた、様々な動揺です。そのためパウロは、この教会を再び訪れようとするのですが、諸事情で実現できませんでした。それゆえ手紙を書きます。そして、その手紙を、テモテを使者として託します。教会からの返事をテモテが受けて、パウロに伝えます。そしてそのようなやり取りがおそらく何度かあり、パウロがテモテからの良い報告を受けて、喜びと感謝、そしてテサロニケの教会の人々からの質問への回答を書いた手紙の一つが、このテサロニケの手紙一であると思われれます。その意味では、手紙はいくつかあったと思われれますが、残っていないのです。

本日の使徒書の個所でパウロは、テサロニケの人々の混乱が収まったことを感謝し、祈っています。ただし、「顔を合わせて、あなたがたの信仰に必要なものを補いたいと、夜も昼も切に祈っています」（一テサ 3：10）とある通り、パウロは、すぐに会うことができないテサロニケの人々のために、毎日祈っていたようです。祈ること、これはどのような宗教にもある事柄ですが、教会の大きな特徴、ことに聖公会の特徴といえます。

祈りは、相手を思うことであり、忘れないことでもあります。祈られるということは、誰かに思われていること、誰かが覚えられ、支えられていることを、自覚することに他なりません。しかし、わたしたちの祈りは、それ以上の事柄があります。それは、「どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてくださいますように、わたしたちがあなたがたを愛しているように」（1テサ 3：12）とパウロが祈っている通り、祈りに

において、主なる神様がかわって下さるということです。言い換えれば、祈りにおいて主なる神様の愛が働くということです。先に見た、イエス様が示してくださる希望とは、この祈りを通して、わたしたちは認識し、また具体化することができるといえるのです。その意味では、祈る限り、イエス様の示された希望は無くならないといえます。

わたしたちは、具体的に名前を挙げて、あるいは事柄を挙げて、日常の中心にして、祈ります。その願いは、この地上の事柄に限定されることもあります。それ以上の何かが起こることを願います。そして、わたしたちの思いを超えて、主なる神様にゆだねることを通して、主なる神様がよしとされること起こることを願います。そのような中で、わたしたちは、まことの希望を見出し、歩むべき道を示されるのだと思います。もちろん、祈るだけでどうするかという批判もあるかもしれませんが、ただただ現実を直視し、その対応策だけを考えると、そこに自分たちの思いを超えた希望は生まれません。また、パウロは、テサロニケの教会の人々に、今すぐ会うことができないので、手紙を書いてテモテに託しました。それでももちろん十分ではないので、祈り続けていたと思います。今なら、電話あるいはメールで手紙以上に連絡をとれるかもしれませんが、現代人のわたしたちも瞬間移動はできません。また、会いたくても会いえない状況もあります。それゆえ、会わない代わりにほかの手段を用います。それでも足りないと思ったときは、祈ります。祈りの大切さは、『聖書』の時代も今も変わらないのです。

皆様もお気づきの通り、代祷は、聖公会の特徴です。そして日々長くなっていくように思えます。しかし、どれだけ長くなっても、この世界で起こっている、すべてを祈り尽くせるわけではありません。わたしたちは、この世界の個人的なことであれ、地球規模のことであれ、祈るということでも、すべてを網羅することもできないのです。しかし、祈りは、魔法でも呪術でもありません。わたしたちは、祈りにおいても、足りないことは多いのですが、だからこそ、わたしたちの祈りを通して、主がかかわって下さり、主の愛が満ちることを願い続けるのです。それがわたしたちの教会の祈り、キリスト者の祈りであり、そのあゆみの中でまことの希望が示されるのです。

わたしたちは、祈ることを通して誰かを支えたいと思います。またわたしたち自身、誰かに祈られることを通して、支えられたいと思います。そのような日常的な祈りを通して、わたしたちの思いを超えた主なる神様の愛が、この世界に働くことを求めたいと思います。その求め続ける中に希望があります。その愛をもっとも分かりやすい形で示して下さったのが、イエス様です。そのイエス様の誕生を祝う準備を、今年もこれから始めます。イエス様の誕生を祝うことを知っているわたしたちは、『聖書』（旧約）やパウロの手紙、「マルコによる福音書」を通して、イエス様について学んでいた人々以上に、希望について深く心に刻むことができると思います。今年にはコロナ禍の制限はあります。しかし、それでも、多くの方々と共に、その希望を分かち合いたいと思います。